OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 並木誠士・吉中充代・米屋優編『現代美術館学』 |
| Author(s) | 野口, 榮子 |
| Citation | デザイン理論. 1998, 37, p. 104-107 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52934 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 並木誠士・吉中充代・米屋優編『現代美術館学』

昭和堂　1998年6月20日　436ページ

野口榮子／大阪芸術大学

『現代美術館学』という本が，昭和堂から出版された。本文419頁に資料編を加えた分厚い本で，ソフトカヴァの装丁にもかかわらず，厚さを測ってみると，3㎝ある。重量は790ｇだ。しかし，黒とグレー，紺とすこしの茶色を用いて埴輪や現代彫刻をアレンジした表紙のデザインは，ひきしまった感じを与えるので，本を手にした時に，すっきりした印象を受ける。

分厚さや重量が語るこの本の重要なことは，たいへん多くの質の高い内容が詰まっているということである。すでに博物館学や博物館実習という用語があり，美術館や博物館で仕事をする学芸員の資格のための取得科目のひとつとなっているが，そのための必要も充分に満たした上で，「現代」の美術館（美術館は博物館にふくまれる概念である。とくにここでは「美術館」にこだわっている）にかんするすべての知識やことがらや意味を，資料や周辺の諸科学などからの意見もとり入れて，新しい展望を打ち出している。したがって，たんなる実用書ではない。美術館というテーマに，これほど多くの問題があったことにむしろ驚かされるのである。

執筆者は，美術館関係の職場をもつ学芸員や研究者たちで，中にはアメリカ在住の人もいる。編集者の3人は，京都工芸繊維大学の助教授で，日本美術史・博物館専攻で，名古屋の徳川美術館に勤務した経験をもつ並木誠士氏，日本美術史専攻で，姫路市立美術館の創立時からの学芸員吉中充代氏，同じく日本美術史専攻で，京都府教育庁，山口県立美術館を経て，現在は東京の東武美術館の学芸員である米屋優氏で，あとの27人は，何らかの意味でその3人と仕事上の関係のある若い人たちだ。全員がたいへんなエネルギーを注いでいる。この分厚い本の中で，指示や図表や注や資料などが，きわめて有機的に組合わされているのも，ほめたいことのひとつである。

全体の構成は，4章から成る。その導入として，美術史専攻の教員が，学生4人と美術館で展覧会をみる0章がある。親しみやすい入り口である。つづいて第Ⅰ章「美術館のすがた」が登場する。たいへん簡便にまとまった欧米と日本の美術館の歴史，日本における法律や制度の問題，コレクションのありかた，学芸員とは何か，美術館の教育活動とは，といった基本的な問題が示される。東南アジアの現状も取り上げている。これによってこの本の利用者は，美術館にかんする概観をもち，問題の出発点を的確に知ることができる。

第Ⅱ章は「展覧会ができるまで」という題で，「集める」「調べる」「取り扱う」「保管する」「修復する」「企画する ── 理念・実践」「展示する ── 理念・実践」「伝える」「展覧会アラカルト」「記録する」という項目から成り立っている。動作をあらわす新しい感覚の用語が，展覧会の，それぞれの仕事の段階を示している。この本の目玉のひとつである「展覧会アラカルト」では，展覧会開催までのプロセスを，執筆者が関係した実際の展覧会の例をとって，具体的に解説している。流石に現場経験のある執筆者たちの底力が十二分に発揮されている。企画から反省までをふくんだ貴重な論述である。展覧会のカタログや，展覧会についての記録資料にまで解説が

及んでいるのもゆきとどいている。

第Ⅲ章は「美術館との対話」である。この本では，すでに第Ⅱ章までで，美術館についての多くの知識や問題点が，納得のいく形で説明されていた。これまで簡単に通過してきたことが，目から鱗の落ちる思いで理解できたのだ。しかし第Ⅲ章を読みすすむにつれて，読者は，美術館にはさらにこのような問題があったということに改めて驚き，感嘆し，息をのむ。それは一見して美術館とはかけはなれたと思われる周辺からの発言である。

まず「美学」――美や芸術について理論的に思考する学問で，ひろい意味では哲学の一分野として，美術館に展示される美術作品についても，その枠内で考察を深めてきたと考えられる。しかし，「美学」という項目で述べられているのは，美術作品を展示する場所としての美術館について，現代の美学の立場から真正面に見すえた優れた理論である。執筆者は言う。美術館のなかで美術作品が，美術館にあるから美術であり，美術を展示するから美術館であるというならば，それは「同語反復」であり，「美術館のなかでは，美術についての根源的な問いが，免除され」「隠蔽されて」しまう。これによって人びとは安心し，「現代日本の教育と文化のなかに深く根を張っているニヒリズムを生み出」す結果になっていると。それはあるモノが美術作品であるかどうかを決定するために必要な人間の言語活動（＝言説）が，本来は個別的であるのに，美術館という公共の場で要求される美術という類概念を語るために，共通言語と化し，美術館は「仮想の〈関係性の場〉になって」いるからである。美術館は，カントが人間について「啓蒙」とは「未成年状態から抜け出す」ことだと言ったような，18世紀の啓蒙時代からのリベラルヒューマニズムに支えられている。それはさらにさまざまな異なった文化や作品を包括しうる場所になっている。しかも19世紀のモダニズムは，たとえばマネのように，美術が美術館を意識して制作をはじめてさえいるのである。しかしかつてのアヴァンギャルドは，美術館を破壊しようとした。現代の美学は，それをさらに越えて，「ポスト植民地主義」「多文化主義」「ポストモダン」の根底を考えなければならない。では現在われわれの前の課題としてのあるべき美術館とはどのようなものだろうか。それはもう一度「〈美術〉とは何かを問うことから出発」するべきである。そして「すぐれた美術作品は，どんなに完成された関係性の場に置かれていようとも，そのどこかに野蛮な直接性が潜んで」おり，「美についての判断が，『直感的』である」と言われるように，この直接性が，作品が私たちの知覚している「世界の〈外部〉につながっている」ことを示す，そのような状況を内包していることを確認することである。そうすれば，美術館は，歴史的所産としての美術作品と，アヴァンギャルド的実験のリストがともにくみこまれ，「複数の異質な言説に貫かれた複雑な階層」をもつ「高次元の多様体」であることになる。すでにそのような「美術館の関係性の場の背後を見通す人びと」が，美術館の中には存在している。「すぐれた展示にはかならず，美術作品を成立させている言説のダイナミズムにたいする深い洞察」があって，「作品がおかれている言説の文脈に働きかけ，美術についての原理的な問いを喚起している。」「これが美学からみたポストモダン状況における美術館の様相」なのである。われわれはこの説明により，これまで予想しなかったような美術と美術館と美学というきわめて密接なことがらの，きわめて現代的な問題提起と解釈を知ることができる。

つづいてわれわれはまた「美術史学」と美

術館にたいするすぐれた意見をきくことができる。「美術館と美術史は，他人の関係というよりも，すこぶる仲のいい双子の兄弟（あるいは姉妹）」であると。美術作品のコレクション（美術館のもと）と分類（美術史のはじまり）は，18世紀の啓蒙思想と同時に出発する。それは「芸術の民主化」のはじまった時代でもある。「民主化」は「教育」の問題と切りはなすことができない。現在でもヨーロッパの大きな美術館でおこなわれている展示の体系は，この時期に「形式を整えはじめ」る。ジャンルの区分，国家や民族による分類，地方や都市（地理＝空間）を横軸とし，時代や世紀という時間を縦軸として，その座標上の１点に美術作品を位置づける方法は，流派，様式，時代様式の概念を生むようになった。美術館の展示と美術史の概念は平行し，個々の画家の展示は，個人の画家の研究と無縁ではなかったのである。しかし，芸術の「民主化」は「官僚化」に，芸術による「教育」は「管理」にもつながる。美術館は作品を「監禁」し，美術館でわれわれは，「埋葬式」や「墓碑銘」をみるのだ。もともと作品が「機能していた文脈の記憶の痕跡」を消し去ろうとすると，そこには「美術館の廃墟」が出現する。「美術史もまた作品を支えてきた文化や社会の記憶をぬぐい落とし，観る主体の問題も等閑に付して，もっぱら『純粋に』色彩や形態を記述し評価する方向へむかって進んでいった」。美術館の展示が眼の高さで１点ずつ横に制作年代順に並べられるようになったことと，美術史の時代認識もまた軌を一にしている。「必然的かつ不可逆的」な時代展開は，近代美術史の自律性を支える考え方であった。執筆者はここで，マネ以降の美術館が，制作者の美術館芸術への志向と破壊という「パラドクシカルなゲーム」と関わっていることにも触れている。そして今日では美術館は，意識的に排除してきた「無意識」や「他者性」に目をむけ，美術史もまた「他の学問との対話のなかで」さまざまな可能性を模索している。そのことが美術史からみた美術館の問題の未来の可能性をつくりだす大きなテーマであろうと結論づけている。ここでわれわれは，「美学」からの問題と「美術史学」からの問題がオーバーラップして，現代の美術館学にとってきわめて重要な問題を提起していることを知る。すでに啓蒙やマネ以降の問題が共通項として登場した。「美術館のニヒリズム」（美学）と「美術館の廃墟」（美術史学）は同じものを指すが，それぞれの立場からの論理的展開が，たいへん興味深いものになっている。二人の執筆者の意見が，現代という場面を前にしてこのような状況をつくりだしたのであろうが，二人を登場させた編集者の功績も忘れてはいけない。

しかし問題はそれにとどまるものではない。「建築学」の立場からは，近代の欧米の美術館の建築として，歴史や具体的事例，二次的となった展示空間，他の機能の要望などが，21世紀に向かっての問題となっている。

「保存科学」の立場からは，美術館の学芸員にとって，ある意味では最も現実的で具体的な問題を，たいへん要領よくわかりやすく説明している。美術品の材質やそれを取り扱う機械，光線，地震と収蔵設備の問題に及んで，必要なことが的確に述べられている。

「社会学」の立場からの発言は，「美術館訪問」という行動――「行く人／行かない人の違い」について有意義な研究である。フランスの社会学者の調査を基礎にして，執筆者が美術館の入場者におこなった調査が中心になっている。高学歴の人がよく美術館へ行くこと，はじめて美術館を訪問した年令と，学歴や「作品に関する知識」の関係，「教養」のもとになるのは，「体験（場かずを踏むこ

と)」という指摘は，この本に精彩を加えている。

次に「フェミニズム」の問題がとりあげられる。フェミニズムは，現代社会においてジェンダー（性差）とともに各方面で注目されている問題だ。執筆者も指摘しているように，フェミニズムと美術館というときには，ふたつのテーマ，つまり男性中心的社会の中で，美術作品の表象する女性がどのようであったか（裸体の問題もふくめて）ということと，女性作家の展示に関する権利や評価の問題が中心となる。ここではワシントンの女性芸術美術館（世界で唯一の）の問題や，女性芸術家の教育，男性中心のイデオロギーなどが問題となる。そしてここでも美術館が，モダニズムの中でつくりあげた「中立性」を打破し，新しい方向を発見する手がかりとしてフェミニズムが理解される。執筆者は女性だが，鋭い論理性をもって問題をみつめ，ややもすれば感情論になりやすい側面を十分に客観視しながら，アメリカでの具体的なデータを駆使して解明をおこなっている。そして「主体としての女性をあえてむき出しの他者として確立し，それによって男性も変わるには」「平等を主張して従来の価値基準に回収される危険と，分離を主張して劣位の他者にとどまる危険」の中で綱渡りをしながら，フェミニズムの美術は，美術館との関係をつくりあげていく必要があるという結論がだされている。

「テレビ」は，ＮＨＫの「新・日曜美術館」の担当者としての執筆者が，森村泰昌のモナ・リザを制作したことによって考えられる問題を中心に，「新聞」は，美術館や百貨店の展覧会と新聞メディアの関係などを歴史的・具体的に記述してあり，いずれも注目に価する。次の「アート・マーケット」は，美術市場の商品としての美術品の問題を，オークションの話題などとともに述べた貴重な項目である。「アートマネジメント」という新しい問題も登場している。現代では，芸術は「アート」とよばれ，「マネジメント」（経営）と結びついた用語が成立した。執筆者はそのことについて，『メセナ白書』や他の資料によりながら，現代社会が要求するアート（個人的でない）と芸術活動が「より効果的で大きな成果をあげるための（支援）活動」について新しい視点から述べている。ミュージアムマネジャーとしての学芸員の問題とも関連する。同時に「アート論」と「幸福論」の追求につながるという指摘がある。そしてこの章は「パブリック・アート」で終わる。パブリック（公共空間における）アートの実例を引用しながら筆者は言う。「美術館という美術の自治区では常識であったことが，日常の生活空間のなかで」「ほんとうに作品が『社会』のなかに溶け込もうとするのならば，『美術』の約束ごとではなく，『社会』の約束ごとに従わなければならない」と。

第Ⅳ章「模索する美術館」は，最後の章として，再び美術館の現場から，実態の確認や未来像へのまなざしといった観点で記述している。「社会教育施設」「コミュニティ・スペース」「情報装置」「研究機関」というテーマのもとに，アップ・トゥ・デイトな問題が登場し，美術館の「利用形態の変化」が指摘されている。美術館は，21世紀に向かって，決してたんなる「ハコ」や「タイムマシン」ではなく，社会の中で機能する機関として，今後ますます重要視されなければならない。そのことを最終章としているこの本に心からの賛辞を贈りたい。

この他に参考文献，コラム，資料，インターネット情報も付し，利用者の便宜をはかっている貴重な労作である。